武士と切腹

岡本恭子

(一) なぜ武士と切腹か

「矢種尽ヌル物ナラバ、自害ヲシタラバヨカルベキニ、犬死センズルゴザンナレ」と、捕われの身となった源為義の独白である（保元物語「為義最後ノ事」）。矢種が尽きるまで戦うこと、そして潔く死ぬこと、これが武士の生きざまであり死にざまであると、一応の型が決められている。また武士の自害方法として大抵は切腹によるものだと、これもまた一応の固定観念をもっている。そうした固定観念が、平家物語に通用しないことを知った上での出発が、この小論にある。

如何なる場合にも武士という者は、すべからく切腹して果てるものだという私だけの思い込みがあったことは否定しない。また切腹を、歴史的流れの中で捉えるならば武士でない者、また女性にもその行為のあったことが認められる。しかし、ここではそうした全般にわたって考察することはしない。標題の「武士」に限定するものである。

ただし標題にいう「武士」という呼称についてはいささか躊躇するものがあるが、ここでは一般にいうところの「もののふ」とか、「弓前馬上に携るならひ」の者という総称としての「武士」という意で使っている。

切腹が自害の手段であったとするその自害もしくは自尽には、二つの意味があると考えている。一つは国家的公刑に

よるもの、いま一つは私意的なものである。戦記文学における切腹は、公刑としてのものでなく私意的なものとして行われていることを踏まえておかなければならない。

『令・獄令』[1]の中に、「凡そ大辟罪決せば皆市にしてせよ。五位以上及び皇親、犯せること悪逆以上に非ずは、家に自尽すること聴せ」とあって、家での「自尽」刑のあったことが理解される。この「自尽」が如何なる方法によるものかが記されていないので判らないが、『続日本紀』[2]に長屋王の事件に触れ、「王をして自尽せしむ」、つまり「自ら経る」と記されている。同じ事件を扱った『日本霊異記』[3]には、「罪なくしてトラハル、此れ決定めて死なむ。他に刑殺されむよりは、如か不、自ら死なん」として、「其の子孫に毒薬を服せしめて、絞り死し」た後に親王自ら服毒したと記している。長屋王の死がいずれであっても、当時の「自尽」には服毒もしくは縊死であったことが判る。その自尽が、後世切腹に変わるのである。

「切腹ハ士以上ノ者ヲ處スル法ナリ」[4]、「切腹ハ獄令ニ云フ所ノ自盡ヲ賜フナリ」[5]、「此刑ハ武門ノ刑ニシテ武士タル者ヲシテ斬首ノ詬辱ヲ免レシムルナリ」[6]とあるこれらの一文が、いずれを典拠にしたものかを分明にすることはできない。

刑罪の歴史上、武士と切腹の関係は一種の「栄誉刑」であるといえよう。しかし、もともとは鎌倉幕府の刑罪の一方法である栄誉刑は、武士にのみ適用された「永不召仕、止出止、勘当、御家人号右放」[7]といった類のもので切腹は含まれていない。法の主体が慣習法であった中世も、後期（室町時代）に入ると、近世的公刑主義の原型が出現したといわれ、切腹が、刑罪体系の中に位置づけられたのは室町末期であったということである[8]。

「死刑ハ五刑中ノ極刑」であり、死刑には「絞斬ノ二刑ナリシガ、鎌倉幕府ノ比ニハ絞罪久シク絶エテ専ヲ斬ノ一刑」[9]になったのだという。そして斬首が正刑としてではなく、別の意味をもって行われていることの事実を、『古事類

苑』の編者は次のように記す。

「軍中ニシテ敵ヲ捕ヘテ斬首シ、戦勝ノ後ニ敵ノ首ヲ斬ルガ如キハ、刑トハ云フベカラザレド」、しかしながら「固ヨリ相離レザルモノニシテ、参考スベキ事モ多ケレバ」と一応の見解を示し、種々の例を列挙している。

「固ヨリ相離レザル」とは、法家による正しい刑でなくて、敵か味方かという武士の論理において行われる斬首も、刑の執行という意味からは同じだと言いたかったのだろう。

さて切腹による自害は、手取早いものだと考えていたのは誤解であることを知った。なぜ誤解かを述べたいのだが、その前に、切腹の起源といわれている例文をあげてみたい。

先ず『播磨風土記』[10]にいうところの、「腹辟の沼」の由来には、「花浪の神の妻」が夫の神を追っては来たが、いかなる理由があったのか「逐に怨み嗔りて、妾、刀以ちて腹を辟きて此の沼に没りき」によって、以後この沼に住む「鮒等、今に五蔵なし」という。つまり腹を切るだけでは死ねずに沼に入って死んだということになる。内臓のない魚の不思議さを語るものだが、その伝承過程に腹を切って死ぬという行為のあったことは認められるが、これを切腹の起源とすることには肯首できない。

二つめは大盗袴垂保輔の切腹死である。『読古事談・第五』に、「刀ヲヌキテ腹ヲサシキリテ腸ヲヒキダシケリ」としたが即死でなく翌日獄中で死んでいる。

三つめは保元物語に登場する源為朝の切腹死である。伊勢貞丈が、「上古には切腹なし」として、この為朝の切腹を最初のものと位置づけた。「腹かき切たれども猶死なれず、後のほねをふつと切てぞ死したり」[11]とする為朝の悲惨な死を切腹の起源とすることに疑問をもつのである。

切腹の歴史を考える上で当然のことながらこうした引用例を用いることは否定できないが、注意すべきことは諸本の制作年代に留意しなければならないのである。たとえば貞丈の用いた保元物語の書写校合の年代を見極める必要がある。

いずれにせよ三例の共通するところは、切腹が死に至らないこと、切腹以外の方法によって死を完成させているということである。また、保輔のように自ら腸を引き出すことができるのか、あるいは腹のどの辺りを突き差しているのかを見極めることは、文脈上困難である。

以上のことを踏まえた上で、次項で切腹を生理学的に見ようと思う。

(二) 切腹は有効な死か

『千葉徳爾・切腹考抄』（以下『切腹考』と記す）において、「自殺形式について、私はこれを単に自己の生命を絶つことを目的とした形式として説明することに、疑問を抱きはじめた」というのだ。その理由として、切腹が即死につながらないこと、容易に腹壁が切れないことによるが、切腹を生理学的な基礎知識としての説明を行っている。

「まず腹壁を切開する方法には、大きくわけて縦、横、斜めの3つが考えられるが、切腹の形式には縦のみというものがなく、横一文字に切るのが多く、斜めに切るものは稀である」というのだ。一番多い一文字腹は、「左の下腹部、臍よりわずか下のところに突立て右に横一文字に腹壁を切断する形をとる」のが普通のやり方であって、臍より下と上では痛みが異るというのである。下腹部の方が「あまり痛みが鋭くない」ようであり、もし苦痛に堪えることに勇気を示すというのならば、「臍の上部を切るべきではなかろうか」というのである。

人体の腹壁を構成する筋肉は縦に走っているので切りやすく、「自殺そのものを遂行するためには当然この方式がかなりの程度普及して然るべきはずである」のに、実際にはそれが行われていないと指摘する。また人体の腹壁は非常に弾力性があって、簡単に刀を突き立てることは難しいようである。そのことは次の一文によっても理解できる。

『八切止夫・切腹論考』（中央公論社）の中で、著者自身の事実に基づく見聞を書いているので触れてみたい。

昭和二十年八月十八日、満州の奉天にて「満人の暴動が始まった」ので、在留日本人たちがある小学校へ避難した時のこととしている。「サーベルを腰に吊った」五人の男達が切腹をするのだと云い出した。その中の一人は口実を作って逃げ出したようで、四人の中の年長者が、「まっ先に刀身をぬき手拭でまきつけてから（中略）気合いもろとも突き刺した」が、腹壁の弾力は強くて「ゴムのフットボールを突いたみたいに切先が腹のところへ窪みをつけたきりで、刀ははね戻ってしまった」という。その男は突いた箇所から血が滲んできたので唾をつけて、「痛いのう」と言ったというのである。

この話には続きがあって、別の男が「生きて虜囚の辱めをうける」ことをよしとせず、「立ったままで刀を腹におしあて前に倒れた」時、赤黒い血が「小鉢に三杯ぐらいヒョッと音をたてて飛んだ」のを見た為か気を失ってしまったのだ。それを見た他の男たちが、「しっかりしろ」と言いながら、死のうとしている男の背をさすっていたというのである。「出血多量で死ぬ迄は七転八倒のひどい苦しみ方をするから、今なら助かるから医者を呼べといわれ、側にいた著者が医者を呼びに行ったのだと書いている。しかし、戻って来た時には三人の男の姿はなく、「切腹人間も、四日後には私にも黙って何処かへ行ってしまった」ということだ。

おかしみを堪えている著者の気持が読む者にも伝染しそうな内容であるが、取り立てて滑稽さを喧伝しようとする意

図はない。力ある男が「気合もろとも突き刺した」としても、容易に腹を切るに至らないことを理解するためである。

『切腹考』においても、他人に補助してもらったり、苦しんでいるところを助けられたりしている事実のあることを指摘している。

袴垂の「腸ヲヒキダシケリ」とするには、どういう方法を取ればよいのか。『切腹考』によれば、一般の切腹例ではほぼ完全に切った場合には約20㎝程度は切ったならば創口がしだいに開き内臓の露出を見るというのだが、「この場合は臍より上を切れば大腸、下ならば小腸が大網膜と共に流出する、ただし深さを三～四センチメートルぐらい切り、内臓は手で引き出さいとほとんど露出しないと予想される」ということである。これを十文字切りにするならば、切口が小さくても露出しやすいというのである。十文字切りとは、まず縦に切ってから横へ引廻すやり方をいうのだが、最初に横一文字に切るとやりにくいという。したがって「見事な十文字切腹は容易に行ない得ない」のである。「苦痛に堪え勇気を示す上では縦一文字にまず切ることが」よいのだけれど、こうした事例はないと『切腹考』は述べている。

生理学的に見て切腹だけで死に至ることの難しさが、近世にみるような介錯人を必要とするようになったのである。しかし、戦争という特異な場所においての人間に、平常時では考えられない精神の昂揚ということを考慮すべき点のあることも理解できる。

㈢　切腹は勇気を誇示するためか

前項でみた切腹死の難しさを、あえて行おうとする武士たちの心の中を覗くことは、神聖な領域を犯すような後ろめたさがある。

「上古には切腹なし」といった貞丈が、為朝の切腹を、「此比より武士勇気を示さんが為に腹を切る事始りしなるべし」と考えていたことに必ずしも肯定できない理由を先述した。

『兵範記』[12]、保元元年(一一五六)八月廿六日条によると、近江の坂田辺りで前兵衛尉源重貞によって捕えられたという記述があるのみで、為朝の其後については史料の上では知り得ない。ただ『史料総覧』には、治承元年(一一七七)三月六日「源為朝大島ニ自殺ス」の記述があって、その記載の根拠を尊卑分脈、大乗院日記目録、保元物語等をあげている。尊卑分脈には、「安元二(一一七六)、三、六伊豆大島被討了」と、「安元三、三、六討死」の二項があり、頭註には「大乗院日記目録與此同」の記事が見える。『史料総覧』と共通の史料に「大乗日記目録」をあげているが、いま管見に及ばずゆえに記述に留め置く。また『史料総覧』にいう「保元物語」と、貞丈のものが同一系統であるのか否かも不明とする。

『半井本』を底本とする保物語[13]では、伊豆大島へ流された為朝の後日譚として、傍若無人の振舞いにより官軍を差し向けられ一戦を交えるのだが、奮戦及ばずと知るや、「敵ハ雲霞ノ勢也。我ハ身一也。縦(たとひ)爰(ここに)射(い)破(やぶり)タリ共、日本国寄(よせ)懸(かけ)バ戦ヒツカレテ後、云甲斐ナキ島ノ奴原ニ打臥ラレテハロ惜カリナン」と言うや、九歳になる嫡男を殺し、「家ニ火ヲサイテ、腹カキ切テゾ伏ニケル」とある。焼死するという方法は、切腹の一助とするためであり、また首を捕られないためでもある。しかし、為朝の首は焼失に及ばなかったのか、都へ運ばれたとある。

首を「院モ御覧有ケリ」とするが、今昔物語によると、死者の首は不吉であり直接見るべきでないとして、絵師に写しとらせてから見るものだとしているのと較べると、時代の差であろうか大きな違いがある。

『金比羅本』[15]では「伊豆国大介狩野工藤茂光もてあつかひていかゞせんとぞ思ひける」という記述で結んでいる。

為朝がいつ、いかなる方法で死んだのかという証左が得られないために、為朝伝説を生む切っ掛けになったことだけ

は確かであろう。

強弓の名手、つまり武芸に秀いでたるもののふの死を、「斬首ノ詬辱ヲ免レシムル」ためには切腹でなければならないとする倫理観が、この為朝伝説を創り上げたといえる。

現存する保元物語諸本の中、鎌倉末期（一三一八年）の書写とされる『文保本』を最古とする他は、宝徳年間（1448～1452）、寛永年間（1620～1644）、元禄年間（1685～1704）、寛延年間（1748～1751）[16]と、その大部分が近世のものであることに注意すべきである。中世武士の「兵の道」から近世の道徳的「武士道」の完成期にあって、校合され書写されていったことを考えると、中世のはじまりと位置づけされた保元の乱、それを材料とした保元物語の中から、中世の武士像を的確に捉えることは必ずしも正しい方法とはいえない。

曲亭馬琴が、『椿説弓張月』を書くに当って参考とした『保元物語』[17]には、為朝の自殺の事は記されているが、「琉球へ渡の説なし。彼説をなすもの、いまだ何に据ること詳せず」というように、為朝は伝説の中で生きながらえてゆく。馬琴が、「保元物語に現われた為朝の記事を実際の為朝の事蹟であると見ていた」[18]のは、江戸時代では保元物語が文学書でなく歴史書として扱われていたからだ[19]ということである。

英雄は不死身でなければならないという考えが、歴史的人物の枠を越えて生かされ理想化される、そこに為朝がある。しかし為朝の切腹に、君臣主従の精神的昂揚を、あるいは男の美学を見出すことは不可能であり、それらの埒外に為朝の切腹がある。

保元物語にはもう一つの切腹がある。[20]

義朝の幼弟たちの斬死の記述に、「四人ノ乳母共、首モ無キ幼人共ヲ横様ニ懐テ、音ヲ調（そろへ）テヲメキ叫」んだと記す。

四人の幼童たちの斬首の様子は、涙なくして読むことも聴くことも出来ない場面設定であるが、特に感動をもって享受したであろうところは、四人の乳母（子守役）たちの行動である。一人の乳母が「我帰テハ誰ヲ見カ慰ベキ。タレニ仕テカ有ベシ共覚ヌ物哉」と言って、「腹カキ切テ伏ニケル」のを後の乳母たちもそれに従ったのである。「腹カキ切テ」とあるから切腹死であろうが、具体的には判らない。ただこの切腹は追腹といって一般に殉死といわれるものである。

殉死は、武士の自殺方法として用いられたが、寛文三年（一六六三）、四代将軍家綱の時に、『武家諸法度』を示すに当り、殉死の禁止令[21]が出るほどの流行をみたようである。また「追腹を切ったのは、明徳三年（一三九二）に管領細川頼之が死んだ際の三島外記の場合より以前にはあまりなく、この事件を記述した『明徳記』には、これは前代未聞の振舞と評している」と、『国史大辞典』は記している。

殉死を共感しうる土壌があればこそ、四人の乳母の死に同情と感動をもって受け止められるのである。

後世、為朝と同じように人気を持ち得た人物に、源義経がいる。義経の切腹を見る前に、義経記においての切腹死は、なんといっても「忠信最期」[22]の章段と思われるので、忠信から見ることにする。

佐藤四郎忠信については頼朝が、「東国にこれ程の者のなかるらん」と言わしむるほどの、武士の中の武士として描かれている。

忠信には信念があった。「死にも果てで生けながら」捕われの身にならないこと、「末々の奴原の手にかかりて射殺されんずるこそ悲しけれ」とすることである。これらは犬死だという考えをもっていた。

忠信は、「膝をつゐ立て居丈高になりて、刀を取直し左の脇の下にかはと刺貫きて、右の肩の下へするりと引廻し、心先に貫きて臍の下まで掻落し」たとある。実に具体的である。「居丈高になりて」、つまり体を後に反すように、腹の

皮を伸してから刀を突き刺しているのだ。内臓が出ないよう膝を立て押さえる、といった仕草は、切腹の作法を心得ていたと思われる。

切腹後の忠信は、「腹を切るに少しも物の障る様にもなき」この名刀を、「屍に添へて東国にまで取られる」ことを厭い、「疵口を掴みて引き開け、拳を握りて腹の中に入れて、腸縁（はらわた）の上に散々に掴出し」たのである。自分の内臓を縁側に取り出し刀を収めるという行動には忠信の執念を感じさせるが、それでも死ねなかったのである。

忠信はいう、「死にかねたる業の程こそ悲しけれ。是もただ餘りに判官を恋しと思ひ奉る故」なのかと。そして、「判官の賜びたりし御帯刀、これを御形見に見て、黄泉もこゝろ安かれ」と、その太刀の先を口に含むと、「手を放って俯伏に、かはと倒れ」ることによって忠信は死を完うしたのである。

忠信の死に方の特異さもさることながら、忠信は、「剛の者の腹切る様を御覧ぜよ」、また「敵に首を取らじとて自害せんする者の為に、これこそ末代の手本よ。鎌倉殿にも自害の様子をも、最後の言葉も見参に入れて給ひ候へ」と言うのである。「剛の者の腹切る様子」といい、「末代の手本よ」ということは、単に勇気を示すだけでなく、更に「剛の者」としての武士の死にざまを示すことになろう。

ここで注目すべきことは、忠信が切腹をするに際して、「万事を鎮めて、剛の者の切腹…」と言ったのに対して、「さらば静かに腹を切らせて首を取れとて、手綱を打捨てこれを見る」という相手方の態度である。後に触れる平家物語の重衡が、切腹しようとした時それを遮られた。ここでは後世よく使われる武士の情がある。いかに剛の者といえども、忠信一人を捕り押えることは簡単なことであったはずだ。しかしそれをしなかった。そして忠信の切腹を認めるのである。

忠信がやったような十文字切り切腹、あるいは腹を掻き切るとか腹を突くといった表現は、特に太平記に多い。その中の一つに、「番馬にて腹切る事」[23]の章段で、越後守仲時は、「一家の運すでに尽きぬれば」として、「腹十文字に掻き切って」死ぬ。追腹をなした者総勢四百三十二人であったと記している。中でも槽谷三郎宗秋は、仲時の腹に突き刺したままの刀を抜き取って、「おのが腹を八文字に掻き破って」から仲時を抱くようにして死んだのである。ここでは十文字切りや八文字切りという切腹の方法よりも、むしろ追腹による人数の多さに驚かされるのである。数の上からみると「高時一門」にはかなわないが、殉死禁止令(一六六二)が出るのも当然と思えるほどのすさまじさである。

因に、殉死の禁止令が成文化されたのは、五代将軍綱吉の天和三年(一六八三)の改訂時であった。

十文字切腹は、苦痛も激しく、内臓露出も確かであるということだから[24]、一文字切りよりは効率のよい自殺方法であると思われる。

太平記「土岐多治見等討死の事」の章段で、多治見の家臣、小笠原孫六の死は切腹ではないが、「日本一の剛の者、謀反に与し自害する有様見置きて、後日の物語にせよと、高声に喚いて、太刀の鋒を口に含み、櫓より飛び落ち、貫かれてこそ死にけれ」とある。先の忠信と同じく、剛の者としての死にざまを示す態度が見られる。剛の者とは普通の武士ではないのだ。武士の中の武士をいうのだとする自負心がよみとれる。腹を切る、内臓を掴み出す、あるいは串ざしの如く突き刺す、といった自害の方法は、見る者聞く者にとっては凄惨としか言いようがないが、当事者たちはこれ以上の壮絶死はないと考えている。がゆえに「日本一の剛の者」としてふさわしい死に方であると認識するのである。

露出した腸に美を感じたのは、作家三島由紀夫であるが、三島が小説『金閣寺』[25]で、「なぜ露出した腸が凄惨なのか(中略)なぜ血の流出が人に衝撃を与えるのだろう。何故人間の内臓が醜いのだろう」、内臓も皮膚も同質の美しさを

もっているのだと書いている。また三島は『美しい死』[26]の中で、「一か八かといふときには戦って死ぬか、自刃するしか道はない。（中略）そのとき、はじめて人間は美しく死ぬことができ、立派に人生を完成することができる」のだという。三島のいう武士と、この小論で扱う武士とは同質のものではないが、先に見た忠信たちの死の潔さという点からみれば、三島のいう美しい死に方と言えるかも知れない。露出した内臓に、あるいは死に方に美を感じるというのは、すべて享受者側の感性と意識の問題であって、当事者たちの意識の埒外にあるといわねばならない。

さて、太平記の高時一門の切腹死[27]が数の上で最高と思われる。長崎二郎高重なる者が、「手本に見せ進らせん」とて「左の小脇に刀を突き立て、右のそば腹まで切り目長に掻き破って、腸を手繰り出して」と勇気を誇示する態度である。その後を追うように次々と切腹していくのだが、中には「自ら首かき落とす人も」あったという。おそらく全員即死とはいえまい。屋形に火をかけ「猛炎昌りに燃え上り、黒煙天を掠め」る中で、総勢八百七十余人の死が完成されたのである。時に元弘三年五月廿二日のことであり、殉死禁止令が出るまでまだ三百年もあった。

源氏も平氏も、「一所にて死なん」とする運命共同体としての意識は強いが、高時一門の死は、まさに行きつくところまでいったという感じがする。精神的昂揚の怖しさを見た思いがする。ただし、運命共同体的意識は、氏族に未来が残されている場合には見られないのは当然といえよう。

さて、再び義経記に戻って、判官義経の死にざまを見よう。

「さて自害の刻限になりたるやらん、又自害は如何様にしたるをよきと云ふやらん」と、兼房に尋ねる。兼房は「佐藤兵衛が京にて仕りたるこそ、後まで人々讃め候へ」という。義経は「仔細なし。さては疵の口をひろきこそよからめ」と言い、「左の乳の下より刀を立て後へ透れと掻切って、疵の口を三方へ掻破り、腸を繰出し」たのである。義経

もまた即死ではない。脇息に寄りかかり北の方の自害、五歳になる若君、生後七日目の姫君たちの死を確認してから、「早々宿所に火をかけよ、とばかり最期の御言葉にて、こと切れ果てさせ給ひけり」とする。義経の、「自害は如何様にしたるをよきと云ふやらん」の発語は、自害の方法を知らなかったというのではない。忠臣忠信の死にざまを義経が知らないはずがない。兼房の「佐藤兵衛が京にて…」と言っただけで、「仔細なし。さては疵の口をひろきこそよからめ」と了解している。義経の発語は、どのような方法での自害が、「後まで人々讃め候」う対象となるかを尋ねたのである。義経はただ一文字に切ってはいない。「三方へ掻き破り、腸を繰出」すという方法をとっている。

切腹が、ただ自害の手段としてだけでなく、忠信や孫六たちのように、自分の死にざまをしかと伝える、見せつけることによって、「後まで人々讃め候」うような意識が読みとれるのである。

「公家ノ恥ヲ助ケムト思フ」、「身命ヲ棄テ合戦ト思フ」[28]とした武士たちは、いまや「私軍（わたくしいくさ）」にて生命を落す。義経記の作者は、はっきりと「私軍」であるという認識がある。

先述の忠信が、鎌倉方の江馬小四郎に、「申すべき事あり。あはれ御邊達は法を知り給はぬものかな。保元平治の合戦と申すは、上と上との御事なれば、内裏にも御所にも恐をなし、思ふ様にこそ振舞ひしが。これはそれに似べくもなし」[29]と、戦の不合理性を訴えるのである。また忠信の首が鎌倉へ下る前に、「六波羅へ行き大路を渡して、東国へ下すべし」という噂さが都にあった。「これは北条殿のきそくや。わうてきの者の獄門に懸けられるべきこそ、大路をば渡せ、これは頼朝が敵、義経が郎等をや。別して渡さるべき首ならず」と、京の貴賤上下をとわず批難したというのである。首を獄門に懸けるのは朝敵の場合であって、忠信は朝敵の対象ではない。つまり頼朝の「私軍」であるというのである。結局は中止となるのだが、戦争に関する大儀名分は後から何とでも付加できるのだが、頼朝・義経戦にはそれが

通用しなかったのである。

為朝とは別の意味で、義経が永く伝説の中で生きた理由の一つに、「私軍」への批難、反撥があったのだと考える。

次に、平家物語の中にどのような切腹死があるのかを見ようと思う。

「宮御最期」の章段で、七十余歳の源三位入道頼政が重傷を負い、「心しづかに自害せん」[30]と決めた。側近の渡辺党の長七唱（となふ）を召して、自分の首を切れと命じるのだが、唱は「主のいけくびうたん事のかなしさ」ゆえに、「御自害候ひて、其後こそ給はり候はめ」と申し出たのである。頼政は「太刀のさきを腹につき立て、うつぶッさまにつらぬかッてぞ失せられける」とある。頼政は腰刀を持っていなかったのだろうか。太刀では腹を突くしか方法のないことは、すでに忠信、孫六たちで見た通りである。「いけくびうたん事のかなしさ」の発語は、物語作者が唱を代弁しているのであるが、これは主の首を打ち落とすという行為は、如何なる理由があっても許されぬ行為であるとするのか、斬首の刑につながる行為として避けたのかは判らない。ただし太平記の中では次のように行われている。

塩飽新右近入道聖遠[31]は子息四郎に、「順死の孝をもっぱらにし、その後自害せよ」と命じた。四郎はそれに従い父を斬った後、同じ太刀で自害している（この章は後に触れる）。四郎と唱の立場が違うというだけのことだろうか。

聖遠父子の首がその後どうなったのか、太平記では全く触れていない。唱の方はどうか。頼政の首を「宇治河ふかき所にしづめ」たとある。『延慶本』[32]によると、「平家の軍兵追懸りてこゝかしこ穴くり求けるほとに木津河のはたにして求出し」たとある。

見つけられないように隠す、その一方で是非にでも見つけようと血眼になって探す。それは首級をあげることが恩賞に繋ることは勿論だが、その恩賞の色合いというか、平家物語と太平記のそれぞれの背景に立脚した戦争意識の違いを

感じるのである。個人の戦功による恩賞が一族に影響を及ぼした前者と、混沌とした時代の、大きな力と力のぶつかり合いが下剋上の世を生み出した後者との違いが、小さな記述に感じるのである。

再び頼政と渡辺唱の章段に戻ると、同じく渡辺党の競（きそふ）についての記述がある。ここでは「腹かききッてぞ」死んだというだけで、具体的描写はない。ただ競については別の章段があって、彼の智略に負けた平家の侍たちが、「いかにもして、いけどりにせん」と、あるいは「鋸で頸きらん」としていることに、追いつめられた競が切腹したというわけである。平家物語の中で見る最初の切腹である。次に信連の切腹を取り上げたいが、生きのびて梶原景時の家来となった章段をもつ平家物語[33]があるので、そちらを先きに見ることにする。

「あッぱれかうの物かな。あッたらおのこをきられむずらん無慙さよ」といわれた信連の武勇は省くとして、「太刀のさき三寸ばかりうちをッて、腹をきらんと腰をさぐれば、鞘巻おちてなかりけり」とした信連は、切腹を果せず生捕らえた。平氏の糺問に対して実に小気味よい応じ方をするのだが、結局のところ流罪となり、源氏の世に至って景時の元へつくという話の展開を見る。

『延慶本』では、以仁王の死を見届けた後死に至っている。遠矢で「膝の節をかせきに射貫かれて片膝を地につけて腰刀を抜つゝ腹巻の引合押切てつか口まで腹につきたて、宮の御とのこもりたる御跡に参て伏し腸（た）くり出して死にけり」とある。この時、「猿程に敵已に責係にけり」とするほど切羽詰った状況にあった信連は、なぜもっと効率のよい死に方をしなかったのか。信連は腰の刀の柄口まで突き刺し腸を繰り出したというのだから、多分疵口を大きく掻き切ったであろうと思われる。とにかく信連は、『延慶本』によれば切腹死したことになる。

信連の伝承のいずれを正とするかは、享受者に委ねられた結果でき上った信連像であると思われるので、改めて論じ

ることもあるまいと考える。

いま一人、「腹かき切ってぞ死にける」人物がいる。「河原合戦」[34]の中で、越後の中太家光という新参者の侍が木曽義仲に向って、「家光は先立ち参らせて、四手の山でこそ待ち参らせ候はめ」と言い残して切腹する。具体的な記述がないので状況は判らないが、ここでは家光の切腹が、「われをすゝむる自害こそ」と、義仲の重い腰をあげさせる切掛けになったとする一説明にすぎないのだ。

追い詰められた義仲は、「日来いかなる高名候へども、最後の時不覚しつれば、ながき疵にて候世」と、乳母の子今井四郎兼平の言葉に促されて自害しようとするが、結果的には果し得ない。敵の太刀先に貫かれた主君の首を見た兼平は、「これを見たまへ、東国の殿原、日本一の剛の者の自害する手本」と叫ぶや、「太刀のさきを口にふくみ、馬よりさかさまにとび落、つらぬかッてぞ夫せにける」とある。切腹ではないが、兼平の死に方がこの章段における最も印象深いものとなっている。

兼平の死は、義紀記の忠信、太平記の孫六たちと同様に、「日本一の剛の者」としての自負がある。平家物語の中での切腹死を求めたが、信連の伝承性の揺れもあるが、義経記や太平記に見たような切腹死はないといえよう。それらしく想像させるものは右に見た通りであり、そして、彼らは「東国の殿原」たちであった。

では平氏側はどうなるか。もちろん様々な死はある。切腹という主題に添うならば一人いるが、正確にいうと乳母による殉死である。「六代被斬」の中に、知忠（知盛の子）が「いた手負うて自害し」た（自害の方法は不明）のを見届けた後、めのとの紀伊次郎兵衛入道が、知忠を膝の上に抱き寄せて、「涙をはらはらと流いて、高声に十念唱へつゝ、腹かき切ッてぞ死にける」とある。この辺りの記述は淡々としていて、死者の声は届かないのである。

切腹をしそこなった男がいた。平重衡は「腹をきらんとしたまふ」人物であったが、阻止されたというのである。

「重衡生捕」[35]では、梶原源太景季の遠矢によって馬を射られた重衡は、「敵はちかづく、馬はよはし、海へうち入れ給ひたりけれど」、遠淺のため入水による自害は不可能と知るや、「物具脱ぎすて、腹をきらんとしたまふ」が、景季と一緒にいた庄の四郎高家によって阻止されたのである。「まさなう候。いづくまでも御供仕らん」というのだが、ここには先述の忠信の時のように、切腹を遂行させてやるという情も、すぐにも首級をあげるという行動には出ていないのである。

『百二十句本』[36]を底本とする平家物語によると、遠矢を射たのは高家であり、「馬はよわる、せんかたなさに馬より飛んでおり、自害せんとや思はれけん」重衡を、「むずと抱きたてまつり、刀をうばひ取」ったとある。重衡は、「恥をさらすだに口惜き」捕われの身となるのである。

平家物語作者の眼目は、重衡が自害できない理由を用意する。それが「重衡被斬」の章段である。

出家することも許されぬ罪人となった重衡が、「京、鎌倉と恥をさらすだに口惜き」武士として、極りない恥辱を受けるに至ったのはなぜか。「せめての罪のむくひ」、つまり奈良炎上の罪を第一級のものと位置づけ、その罪の重さによって自害できなかったのだと、そして、「つゐにのがれはつべき身にもあらず」今を、重衡自身に納得させていくのである。しかし重衡は、己れの罪を納得し、従容として死に向ったわけではない。

刑の執行が近づいた時、重衡は「としごろ召しつかはれける侍に、木工右馬允知時といふ」者との面会が許されている。知時に向って、「仏ををがみたてまツてきればやを思ふはいかゞせんずる。あまりに罪ふかうおぼゆるに」と言うのである。重衡の申し出を受けた知時は、「そのへんにおはしける仏を、一体むかへたてまッて出きたり」と、その

仏（阿弥陀仏）の御手と重衡に、知時自らの「狩衣の袖のくゝりをといて」結び合わせるのである。これで西方浄土への旅立ちの準備が整ったわけである。しかし、平家物語作者は、重衡をそのまま死なせないのである。重衡と仏との対話、いや重衡が仏に訴えかける口上を用意している。一部を引用すると、

いま重衡が逆罪をおかす事、まッたく愚意の発起にあらず。只世に随がふことはりを存斗也。命をたもつ物、誰か王命を蔑如する。生をうくる物、誰か父の命をそむかん。（中略）理非仏陀の照覧にあり。（以下略）

と。大罪を犯すに至った起因は、「只世に随がふことはり」に準じたまでであって、「まッたく愚意の発起にあらず」と言い切った。

世間の道理に従うという理屈は、源頼朝にもある。生捕られた平宗盛に向って、自分が今あるのは「ひとへに入道殿の御恩也」、しかしながら今、平氏が「朝敵となり給ひて追討すべき由、院宣を給はる間、さのみ王地にはらまれて、詔命をそむくべきにもあらねば力不及」（「大臣斬」）であったからだと弁明している。この発語は重衡のそれと同義である。

「大犯の悪人」か否かは誰が決めるのか、誰れにも決められないのだ。決められる人があるとしたらそれは仏のみである（「理非仏陀の照覧にあり」）と、重衡は言いたかったのである。

今昔物語集[37]の、破戒不信の悪人が臨終に発心し往生したという話と比べて、重衡の章段が何故かくも仏教に近づけたのかを考えてみたいと思う。

今昔物語集で、「罪ヲ造ルヲ以テ役（やく）トセリ。殺生放逸惣（すべ）テ無レ限シ」とする男が、臨終近くになって、「火ノ車来テ、我レヲ迎ヘムトス」夢を見たと言って泣いた。枕頭に侍す僧が、お前は今まで信じなかった地獄というものを今、信じ

る気になったのかと問う。「深ク信ジッ」と答えた男に対して、「然レバ『弥陀ノ念仏ヲ唱フレバ、必ズ極楽ニ往生ス』ト云フ事ヲ信ゼヨ、此レモ仏ノ説キ教ヘ給ヘル所也」と教導するのである。男は「南無阿弥陀仏ト慥(たしか)ニ千度唱」えるのだが、男をそのまま静かい死なせはしない。僧は「火ノ車ハ、尚見エヤ否ヤト」と問うのである。不信の徒に死後の世界は与えられていない。地獄を信じることは極楽を信じることでもある。たった今、男は地獄の存在を信じたのである。そして答えた、「火ノ車ハ勿ニ失ヌ。金色シタル大キナル蓮花一葉ナム、目ノ前ニ見ユル」と。

念仏によって確実に往生できたか否を確認することは、平安時代の『往生伝』に説かれるところである。

では重衡の往生に立ち戻る前に、清盛の臨終を考えてみたい。

清盛が高熱に苦しむ時、妻の夢によって無間地獄へ行くことを予想させる。清盛は、「今生の望一事ものこる処なし」とするほど栄花を極めたのは、度々の朝敵を平らげた恩賞によるものであったと述懐する。しかし思い残すことがあり、それは「伊豆国の流人、前兵衛佐頼朝が頸を見ざりつる」ことであるといい、死後「堂塔をも立て孝養をもすべからず。やがて打手をつかはし、頼朝が首をはねて、わがはかのまへに懸くべし」と命じるのである。こうした清盛の態度に平家物語作者は「罪ふかけれ」という。

清盛の臨終には、罪を悔い後生を願う一念はどこにもない。武士としての生き方を、信念を貫くばかりである。仏へ身を預けることも、仏教への妥協も認めてはいないのである。敢然として地獄へ向ったのである。「伝へ承るこそ心も詞も及ばれぬ」とする清盛の死は、こうあらねばならなかったのだろうか。

重衡は違った。「重衡が後生、いかがし候べき」かと、法然上人に尋ねる（巻十「戒文」）。「政務にほだされ、驕慢の心のみふかくして、かへッて当来の昇沈をかへりみ」なかったこと、また「人をほろぼし身をたすからんと思ふ悪心の

み遮て、善心はかって発ら」なかったのだというのだ。こうした後悔の念は、重衡が捕われの身であること、同時に平家一族の未来が絶無であることを前提としている。清盛の場合にはまだ多くの子孫と沢山の未来があったという違いはある。

重衡は南都炎上の事に触れ、これらは「君につかへ世に従う法」からは逃れられなかったこと、何よりも「衆徒の悪行をしづめんが為に」やったことであり、寺院炎上は初めからの行動に入っていたわけではないと言うのである。「衆徒の悪行をしづめん為に」は、という言葉は法然に対しての懺悔であるが、「重衡被斬」では衆徒の手前があった為か、「理非仏陀の照覧にあり」という言葉に置きかえられている。重衡は後生安楽のために、「一声称念罪皆除と念ずることを教えられ、更に「十戒をさづけられ」たのである。重衡の臨終に際しての準備は完璧といえるまでに整えられているのである。今昔物語集に見た悪人往生よりも、こごては一歩踏み込んでいる。言い換えれば、仏を自分の方へ引き寄せているといえよう。すなわち、前代では生きている者が死に往く人のために、死後の安楽を願うかたちで現われていた浄土教信仰が、ここでは往生者自身が自分のために死後の安楽を志向するという型に変化していることを認めるのである。

重衡は斬られた。平家物語作者はいう、「日来の悪行はさる事なれ共、いまのありさまを見たてまつるに、数千の大衆も守護の武士も、みな涙ぞ流しける」と。一体、なに対して涙を流したというのか。清盛に対しては、「心も詞も及ばれぬ」人として、あるいは「罪深かけれ」とする評価しか与えなかったのはなぜか。平家の悪業は清盛の死によって終ったわけではないとする前提に、平家物語は展開する。また王法・仏法を車の両輪とし、均衡を保とうと考えたのは王家の方であって、平氏に限らず武家側には、武士の面目にかけて仏法と対立しなければならない理屈があった。仏教

がこの時期混迷の中にあったことも事実であり、平家物語はこうした「王法・仏法」とのしのぎ合いの上に存しているといえる。

悪者清盛の延長線に悪者重衡を置いた。清盛は仏法と対峙したまま死に至っている。重衡は法然の導きによって阿弥陀仏の手に委ねられた。更に言えば、清盛は如何にして生くべきかを考えたが、重衡は如何にして極楽往生できるかを考えた人間として、平家物語は描くのである。しかし、ここで考えなければならない問題がある。

悪人でも救われるとした浄土教思想から見て、なぜ清盛は救われなかったのかということである。清盛を、仏教との妥協を許していない。あくまでも現世を、現実の生命を信じた人間として描いている。「無間地獄」の「無」の字だけを夢に見させる方法は、最後の一念によって、その「無」も消える可能性を残したわけだが、清盛に最後の一念を思い起こさせることはなかったのである。文学的解釈としては、「心も詞も及ばれぬ」悪者の死にざまにふさわしいとする一貫性をもっている。では仏教的解釈はどうあるべきなのだろうか、という疑問をもつのである。

仏教的思惟に立っても、やはり右に同じ解釈が成り立つというのか。それでは広汎なひろがりを見せた浄土教思想は、この清盛に限って通用しなかったというのだろうか。確かに仏教思想は一枚岩ではない。しかし、浄土教思想を否定するもの、また対立する思想はないと思われるのに、なぜ清盛は救われなかったのか、である。そこで考えられるのは、本覚思想の影響がなかったか、ということである。

本覚思想について詳しく論述する力は持たないが、概略を次のようにまとめられるのではないかと思う。

院政期ごろに流行したといわれる本覚思想は、もともとあった天台本覚思想と形を変えていったらしく、そこでは人間はすでに悟りを開いているのだ、ありのままの現実がそのまま悟りであるから、わざわざ求めるべき悟りはない。つ

まり現世はそのまま悟りの世界であるから、浄土というものが別にあるわけではないのだという考え方である。この現実世界が真理そのものの世界として肯定されるならば、わざわざ苦しい修行をしたり、またありもしない浄土を願うことなど、到底考えも及ばぬことであるというのである。こうした思想が仏教の堕落につながるのだが、また新鎌倉仏教の祖師たちは、この本覚思想の否定から出発しているのだが、源平争乱期には、祖師たちの影響の大部分はまだ及んでいないのである。

こうした本覚思想が清盛の人間像に何らかの影響を与えているとすれば、当然のことながら清盛の死は重衡と同じであってはならない。あくまでも現実を直視した認識を示す人間として描かねばならなかったはずである。

悪者清盛から悪者重衡を一本の線で繋ぎながら、両者には大きな隔りのあることが理解される。すでに重衡の悪業はひとり重衡のものではない。「世の随うことはり」であるとする認識がより強いのである。そして徹底的に浄土思想への傾斜が見られる。両者の隔りを考える方法の一つに、平家物語の成長過程があると思うが現段階でそれを論じることはできない。

平家物語の中の武人たちにはなぜ切腹死がないのか。信連の伝承の揺れはあるが、またことば上の切腹はあっても具体性に乏しく、壮絶な、と思わせる切腹死はなかった。

この解答を導き出すまでに積み残した多くの問題がある。たとえば宗教、刀、諸本の問題等々、あらゆる方面を視野にいれなければ、早計に解答を導き出すことは不可能であると思われる。

切腹の歴史的原点を考える時、先述した風土記「腹辟沼」の記述を史料として古いという位置づけは必ずしも正確さを欠くであろうし、また武士と切腹を結びつける原点を保元物語の為朝に求めることも危険である。日本人がなぜ腹を

切るのか、それを武士道精神と結びつける前に、民俗的精神の根元が解明できなければ切腹の歴史原点は語れないのではないかと考えている。

確かに平氏の武士としての意識と、近世（江戸時代）のそれと並列して考えることはできない。近世にみるような集団の秩序を守るための、個人の責任遂行を前提とした死は平家物語にはない。まず戦うことが前提にあって、いかにして死ぬかではなく、いかにして戦い抜くかが優先されているのである。そして敗戦の原因を、「運命すでにつきんずる」、「一門の運命はやつきぬ」ところにあったとしている。一所懸命守るべき所領が安堵されているという、未来に繋ぎうる死は平氏一族には与えられていない。

平氏一族の貴族化ということをよく聞くが、貴族化については、源頼朝をはじめとする鎌倉方についても考えねばならぬ問題をもっている。ただ薄化粧をする、かねぐろをつけるといったことは源氏方にはなかった。

「日本一の剛の者」というべき武士は、「東国の殿原」であり、「東国の武士ほどおそろしかりける者はなし」（「二度懸」）と平氏側にいわしむる程の、勇猛果敢な武士たちの集団と切腹は無関係でないことだけは確かである。

切腹と刀の関係は深い。また「刀」の問題は奥深いものがある。次項で自害と刀、あるいは太刀について、その描写の中に見ながら、この小論を終りたいと思う。

(四) 切腹と刀について

切腹を考える上で、多くの問題を抱え込んだ中の一つに「刀」の問題があった。いま深く立ち入ることはできないので、すでに引用した自害描写の中で用いる刀、太刀を確認するに留めたい。

まず義経記の忠信切腹の際の独白を思い出してみよう。「あれは刀や舞房（まうふさ）に誂へて、よくよく作ると云ひたりし効あり。腹を切るに少しも物の障る様にもなきものかな」と言い、「黄泉まで持つべき」と自らの腹の中へ収めた。それでも死にきれずに、「太刀を取りて、先を口に含みて」前に倒れ込んで死を完成させている。その太刀とは、「判官の賜びたりし御帯刀」であるというのだ。主君を慕い、かって判官が住んだという屋敷に主君の影を求めた上で、太刀を「御形見に見、黄泉にもこゝろ安かれし」とした忠信が、なぜその太刀で切腹しなかったのか、である。

判官義経の場合はどうか。「三条の小鍛冶が剣所望の為に打ちて」の刀であると記す。やはり即死ではなかったことは先述の通りである。両者共に守刀として特別誂えのものであり、義経のものは「六寸五分」と具体的な記述がある。

太平記の、「日本一の剛の者…」と言った小笠原孫六も、平家物語の今井四郎兼平も、義経記の忠信も、みな太刀先を口に含んで貫かれて死を完うする。刀と太刀の用途の区別がはっきりとしていたことが理解される。

自害の方法として太刀は即効性を有していると思われるが、刀、太刀のいずれであっても、勇気を誇示するための、という共通認識をもって自害しているとは言い切れない一面もある。

義経の特別誂えの刀、「六寸五分」という寸法だが、長さが特別誂いなのかあるいは特別の材質なのか判らない。ただ次の引用例と比較してみると、義経の刀はかなり短いことが判る。

平家物語「殿上闇討」[38]の中で、忠盛が「大なる鞘巻を用意して、束帯のしたにしどけなげにさし」て昇殿したとある。「鞘巻」（短刀）が「大なる」と記しているところを見ると、普通の寸法より大きいということであろう。

『延慶本』[39]によると、「一尺三寸ある黒鞘巻の刀を用意して」とある。しかも「刀の柄を四、五寸計に指出て常は手打かけて」と、忠盛の姿態が具体的である。となるとこの「一尺三寸」は特別誂えの刀ということになる。

『平家物語全注釈』[40]には、「鍔のない短刀。普通長さ八、九寸。」とあるが、これが当時の標準寸法ならば、義経の「六寸五分」はかなり短いものであり、忠盛のものはかなり長いといえよう。

『古今要覧稿』[41]には、足利義昭遺物の短刀として、「鞘長一尺一寸一分」と記されている。もし鞘長寸法を示すのが常識とするならば、実際の刀身の寸法は如何ほどなのだろうか。忠盛の「一尺三寸」にも同じことが言えるが、忠盛の場合、彼特有のパフォーマンスであるならば、やはり通常より長いもの、ということになる。

義経の刀が、「鞘巻」であるのかどうか判らないが、必ずしも腰刀とは限らず、懐中に忍ばせるものであるとするならば、「六寸五分」は納得できる。

太平記にいう、「高泰が佩きたる太刀は、面影と名付けて、来太郎国行が百日精進して百貫にも三尺三寸に打った[42]」代物であったことが判る。鍛冶師の精魂が込められた一品であったことが判る。敵方は「ただ十方より遠矢に射るばかりにて、寄せ合はせんとする者なかりけり」とするほどの威力が太刀にも高泰に感じられたということであろう。しかし肝心の高泰の「その後は死生を知らずなりにけり」、ということである。「三尺三寸」の太刀が標準的寸法かどうか。わざわざ長さを明記するということは、標準より長いか短かいのいずれかであろうが判らない。

先きに触れた『延慶本』、忠盛昇殿の章で忠盛を守護するため庭で控えていた薩摩平六家長が、「備前作ノ三尺五寸アリケル」太刀を持っていたとある。いずれも各自の好みに合った刀剣が造れるほど、技術、材質共に進歩していたことだけは理解できる。

先述した入道聖遠父子の自害（太平記）だが、聖遠の首を斬ったその太刀で、四郎は「鐔本まで己れが腹に突き貫き、うつぶさまにぞ臥しけれ」とあって、ところがである、この様子を見ていた郎等三人が、「走りより、同じ太刀に

貫かれて、串にさしたる魚肉の如く頭を連ねて伏したりけり」とする死にざまを、どのように解すればよいのであろうか。つまり太刀の長さを、「三尺五寸」か「三尺三寸」のいずれかを例としたとき、どちらにしても約一メートルほどの太刀に四人の男が串刺しになれるものかということである。多分これは数字の問題でなく、殉死の行為に比重を置いていると思われる。文字通り「一所に死なん」の精神が生きていよう。

平家物語「橋合戦」で、三井寺の僧兵筒井淨妙明秀の戦いぶりが記されているが、弓、長刀、太刀と、状況に合わせて使い分けていくのである。最後の太刀が目貫の元から折れて抜け落ちた時、「たのむところ腰刀、ひとへに死なんとぞ」とばかりに戦う。すべての兵士が明秀のように、種々の武具を持っているわけではないゆえにこれが記事になるのである。

太刀は至近距離で斬る、突く、あるいは己れの体重を預けて自害する時に使用する。刀には腰刀（鞘巻）、懐刀があって、敵対する者を組み伏せ首を掻く。そして自害に使用するといった使い分けは、何といっても戦争の方法の変化にあろう。武器の発達は、戦争と深く結びつき、これらは時代を越えたところにあるのは現代の世界地図が教えてくれている。

戦記文学は、何本もの色糸で織り上げられている。時には、別の時代に染め上げた糸をしのばせて、あたかも最初からのものであるかのような顔をしている場合もある。それらの糸の一本一本に必ず時代の顔があるはずである。切腹もその一本の糸に過ぎない。しかし、「切腹の糸」を簡単に取り出すことも、また元に織り込むこともできないまゝ立往生している。まさに巨象のしっぽの先端を触れたにすぎない。そして、沢山な課題を抱えたまゝペンを置かねばならないのである。

紙数の都合上、太平記は保元物語、義経記、平家物語のそれぞれの問題とする描写を考える上で、部分的に引用したにすぎない。

（注）

(1)『律令』（日本思想史大系3）岩波書店

(2)『完訳注釈続日本記』（現代思潮社）「太平元年二月十二日の条に、次の記述がある。

王をして自尽せしむ。其の室二品吉備内親王、男従四位下膳夫王・无位桑田王、葛木王・鉤取王ら同じくまた自ら経る。及ち悉く家内の人等を捉へ、左右衛士・兵衛等の府に禁著せり。（中略）長屋王は犯に依りて誅に伏す云々。

しかし、罪人であっても長屋王は天武天皇の孫であるゆえ、「その葬を醜くすることなかれ」と記している。

(3)「日本古典文学大系」（一七三頁）岩波書店

(4)『古事類苑(24)・法律部三十三』吉川弘文館

(5)『古事類苑(23)・法律部十八』吉川弘文館

(6)(5)に同じ

(7)石井良助著『刑罪の歴史』明石書店

(8)(7)に同じ

(9)『古事類苑(23)・法律部十八』吉川弘文館

(10)「日本古典文学大系」（三四七頁）岩波書店

(11)『古事類苑(23)・法律部五』吉川弘文館

(12)『兵範記』（史料大成）臨川書店
(13)「新日本古典文学大系」岩波書店
(14)「日本古典文学大系」(四)—三六七頁）
「日本古典文学大系」(四)—四四一頁）小学館
(15)「日本古典文学大系」・「日本の文学」ほるぷ出版
(16)「日本古典文学大系・諸本解題・十一頁
(17)「日本古典文学大系・解読」
(18)「(17)」に同じ
(19)「(17)」に同じ
(20)「新日本古典文学大系」（一一一頁）
(21)『国史大辞典(21)』（四一六頁）
(22)「日本古典文学大系(6)」・「日本古典文学全集(6)」両本の底本は異るが、同一原本を用いていることがわかる。
(23)「日本古典文学全書」（四七〇頁）
(24)千葉徳爾著『日本人はなぜ切腹するのか』（三三頁）東京堂出版
(25)三島由紀夫著『金閣寺』（五八頁）新潮文庫
(26)『三島由紀夫全集』新潮社
(27)「日本古典文学全集巻十」（五三七頁）
(28)『今昔物語』「平将門初謀反被誅語」「日本古典文学全集・巻二十五」

(29)「日本古典文学全集」(三三五頁)
(30)「新日本古典文学大系」(二四四頁)(以下、平家物語の引用文は同書による)
(31)『太平記・巻十』「日本古典文学全集」(五一九頁)
(32)吉澤義則校註『延慶本平家物語』(応永書写)勉誠社
(33)「新古典文学大系」(巻四)
(34)「(33)」に同じ
(35)「(33)」に同じ
(36)水原一校註『平家物語』新潮社
(37)「日本古典文学全集」(巻十五・四十七話)
(38)「新日本古典文学大系」(巻一)
(39)「(32)」に同じ
(40)冨倉徳次郎著『平家物語全注釈』(上)(四八頁)
(41)屋代弘賢編『古今要覧稿・巻百二十一)』原書房
(42)「日本古典文学全集」(五一二頁)